

審査経過および総評

第1次審査

応募のあった 11 点すべてが、本プロポーザルの主旨を真正面から受け止めるとともに、地域を入念に調べ、読み解き、新しい地域の文化的施設を提案したものであり、設計者の熱意、エネルギーが伝わるものであった。敷地の環境や周辺の交通事情が複雑なことから施設へのアクセス、駐車場、広場などのゾーニングにおいて多岐の提案が見られた。複合的な施設であることからその結合と分散については設計者の考え方方が強く反映されるところであり、第 1 次審査ではどれかに偏することなくいくつかのパターンが選ばれた。また、地方の文化ホールの管理・運営のプログラムは重要な課題であることから、市民を巻き込んだ設計プロセスの重視、担い手の育成、施設完成後の運営などへの洞察が的確で、具体的かつ実現性が高い明確な設計体制を示した提案が高い評価を得た。

審査は、まず計画、設備、構造の専門委員が提案ごとにその提案のポイントを解説し、お互いに共通の理解を深めたうえで、それぞれ個別の評価に入った。審査の判断の難しさは、設計者を選ぶことで、その能力と過去の実績も判定に組み込まれるを得ない点である。書類提出された技術力の評価において組織力、設計業績のある組織が優位に立つことになるのは否めない。評価の結果は下表のとおりである。

評価の結果から、まず 8 位～11 位の提案を特に強く推す委員が無かったのでこれらを選外とした。次いで、4 位～7 位の提案を比較検討し、点差は僅かであるが、4 位と 5 位に優位性があると認め、6 位、7 位を選外とした。ここで、改めて、採点表からほぼ全員が上位と認めている 1 位～3 位および 4 位、5 位を並べて展覧し、全員一致でこの 5 作品をヒアリング対象とすることで合意した。

第1次審査結果

受付番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
実績等評価	27.8	35.4	32.9	36.3	39.7	27.9	34.4	26.9	35.1	29.7	31.1
提案評価	80.1	95.1	83.7	91.7	98.0	92.0	87.3	86.7	76.1	96.0	88.3
合計	107.9	130.5	116.6	128.0	137.7	119.9	121.7	113.6	111.2	125.7	119.4
順位	11	2	8	3	1	6	5	9	10	4	7

第2次審査

第2次審査では、第1次で書類審査を通過した5者によるプレゼンテーションとヒアリングを公開で実施し、ヒアリング終了後、審査委員のみによる審査委員会を行った。5者の案はいずれも他案に特色を持つ提案であり、プレゼンテーションは市の活性化にも言及する先見性のある優れたものであった。審査は全委員がそれぞれ評価を出し合い、議論が出尽くしたところで、投票に入り、1位（受付番号 5）、2位（受付番号 10）、3位（受付番号 2）、4位（受付番号 4）、5位（受付番号 7）という結果を得た。議論の結果、1位および2位の、「佐藤総合計画案」と「環境デザイン研究所案」を最終審査に残すことで合意し、3者が退けられた。

両者の案は、様々な面においてここまで退けられた案の特徴を対比的に示すもので、シンボル的表現に対して、親密性の協調、駐車場の集中配置に対して分散配置、空間の非日常性強調に対して日常性の重視など、この建築の何に重きを置くのか設計者の主張が明白に分かれたもので、評価は拮抗し、優劣つけがたいものであった。しかし、最終的に審査委員会は、両者の優れた点を認めながらも総合的にバランスがとれ、日常性を重視し、地域になじんだ穏やかな町並みの風景を感じさせる「佐藤総合計画案」を最優秀案に選んだ。

以下に、最優秀者と優秀者および最終審査に残った提案の講評を示す。

◇最優秀者「佐藤総合計画」

杜の中をイメージした提案は他にもあったが、駐車場を分散配置することで、緑豊かな町並みを予感させる風景を実現した。駐車を分散させ台数をフレキシブルに操作することにより、日常の利用に即したヒューマンでアクセシビリティにすぐれた外部空間を構成している。市民が気軽に立ち寄り滞留できる工夫があり、中心市街地への開き方も絶妙である。施設を通り抜けることができ、日常の中で市民が穏やかに交流できる提案を高く評価した。

屋外広場に連なる大きな内部交流広場（こもれびひろば）は、内部の全ての空間にいたる起点でもあり、冬の長いこの地方にあって、木漏れ日が降り注ぎ、心地よく、日がな一日過ごせるような空間を感じさせるものがある。エコツリーと相まって広場へのしつらいにも多くの可能性を示唆している。

一方、市民との“共動”による施設づくり、施設の運営面での提案ではやや具体性を欠いた。しかし、案全体の構成、これまでの類似施設の設計実績などから、設計案を市民との“共動”で作り上げるパートナーとして十分な力量があると認めた。市民との対話の中で、内容の完成度を高めることを期待したい。

◇優秀者「環境デザイン研究所」

2つのボリュームを内部の交流広場で繋ぎ、外部の交流広場へと展開する明快なゾーニングである。施設を遊環回廊として位置づけ、山車や雁木をモチーフとしたRCと木造のハイブリッドな空間構成はダイナミックで、地球環境都市建築スタイルとして鹿角から発信するという壮大な構想に審査委員は魅了された。5つの設計手法と3つの目標という市民を巻き込んだ業務体制もこのプロポーザルの主旨にかなうものである。花輪ばやしが通りぬけるこの祝祭的な空間は、祭りの時に市民熱狂の中で最も精彩を放ち、輝く施設となるだろう。一方で、審査委員の多くは日常の市民利用を考える時、これにとまどいと違和感を持った。

◇受付番号2

応募提案中、唯一の平屋による計画である。ユニバーサルデザイン、コストバランスに配慮し、管理しやすい、分かりやすい計画として高い評価を得た。市民を巻き込んだワークショップ等の提案は具体的で群を抜いていた。こうした技術力の高さ、手堅さ、市民との“共動”に魅力を感じつつも、内部空間の魅力表現の弱さ、外部広場の狭隘さ、中心市街地への展開の仕方に疑問を感じた。

◇受付番号4

複合される機能の関連性を強化し利用の相乗効果をねらった計画は他にも多く見られたが、その中最もバランス良く、内部の空間的魅力も引き出したものとして高く評価された。オープンな図書館、見る見られる関係の中でまちづくりに展開するコンセプトは、地域活性化拠点としての可能性を示すものであった。一方で、外部広場と内部空間の関係や環状列石からイメージしたというラウンドフォルムは、展開可能とはいえ、審査委員に受け入れられなかった。

◇受付番号7

東西に通り抜けできる交流広場（ストリート）を軸に北側にホール南側に図書館、交流施設を配置した明快なゾーニングである。ホールからホワイエ、小ホール、野外客席スペース（前庭）へと規模に応じてフレキシブルに展開できるイベント空間はこの提案の魅力であり、その運営手法も斬新であった。ただ、この地域で考えられるイベントの内容、想定される規模、運営する市民組織を考えると、これを効果的に活用することへのリアリティが感じられなかった。

終わりに、本プロポーザルに貴重な時間を費やして真摯にご努力いただいた皆さんに心より感謝申し上げます。

（仮称）鹿角市学習文化交流施設基本設計プロポーザル審査委員会
委員長 谷津 憲司